

卒業展

University of the Ryukyus

Graduation

Works

Exhibition 2020

2019年度
琉球大学
教育学部 美術教育専修
卒業展

作品
研究題目・研究概要

—教育学部 美術教育専修—

西泊 優香	NISHIDOMARI Yuka
名嘉 溪	NAKA Kei
幸地 修	KOUCHI Osamu

Yuka

Nisidomari

西泊 優香

コラージュによる表現方法の探求

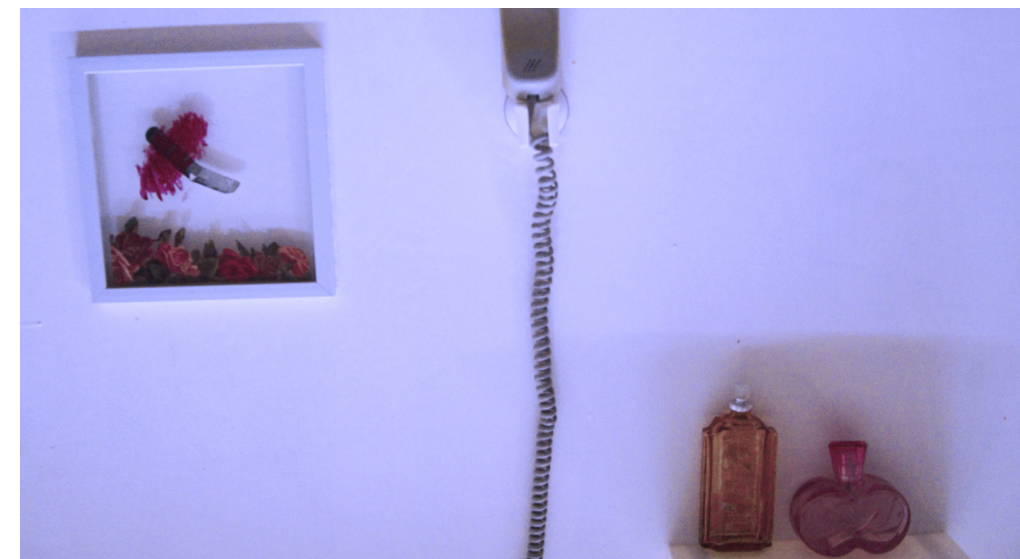
私は派手なものが好きだ。それは普段私が身に付けている服や服飾品、大袈裟な宗教のシンボルや日本の伝統的な装飾表現、世間に広く知れ渡っているポップアート、西洋の表現など多岐にわたる。

私の作品は、それらをコラージュといった技法で制作し表現している。ある特定のイメージを持ったもの同士、または自分だけがそのものに対して持っている印象の異なったもの同士が作品として一つの画面に存在することによって、自分自身も、そして私の作品をご覧になる皆様にも新しい見方やイメージを見出してほしいと思っている。



▲「ヨクシツ」 サイズ：183 × 92.5 × 94cm

材料：ベニヤ、廃材、紙、布、絵の具、鏡、木工ボンド



ユニットバスの、複数の用具と異なった機能があの狭い空間の中に違和感なく収まっている所に私は魅力を感じる。

私が感じているユニットバスという空間への印象は、狭い、機能的、詰まっている、安っぽい、隠れる、安心感、孤独感といった言葉で表すことができる。それらは、私がこれまで制作を行っていく中で見つけた“派手さ”の内側にある弱さや脆さなどの暗い感情を隠す、あるいは表現するために最適なものだと考え、それらの要素を集めた立体物を今回制作してみた。

隠されるからこそ覗いてみたくなるような、そういったユニットバスという空間と“派手さ”の内側にある感情に共通しているものを、私の作品を通して感じてほしい。

研究題目を設定して、初めは作品の中身（コンセプト）というよりは、見た目のおもしろさを重視して制作していたため、これらは試作としての意味合いが強い。

私が苦手としている作品にフレームをつけるという行為とは逆に、フレーム自体を作品にしようしたり、同じ形のものを並べたり重ねたりして、イメージや奥行きを広がり表現しようと試みたり、絵を描く際、通常では使用しないもの（化粧品など）でドローイングをしてみたり、作品を制作していく過程で出たマスキング用のテープや下敷きとして使用したスケッチブックの一部などを並び替えて再構成することで、作品として成り立っていることに気付くことが出来たりなど、平面的な作品を中心にいろいろな方法で制作を行った。

「私は、派手なものが好きだ」

▶ 一次報告会における作品群



▲「光」 43.5 × 54 × 24cm ディスプレイ、絵の具、紙、ボール紙

「いつも濃い口紅をつけている 本当の理由はね.....。」

制作を始めた当初はひたすらに派手なコラージュ作品を作っていた。平面、立体、それらの上からさらにプロジェクション、ドローイングをするなど素材を変えながらコラージュの技法としていろいろ試してきた。しかし、制作を進めていくにつれ、途中から私がこの作品で表現したいことや感じてほしいことなど、美術作品として一番肝心な中身の部分を考えることを疎かにしてきたことに気付いた。

そこで一旦立ち止まり、私の作品を見る人に一番印象付けたかった“派手”ということに関して考えてみた。するとそこには見た目の派手さとは正反対に思えるものがその内側に紛れ込んでいると強く感じるようになった。作品を派手なものにしたかったのも、初めは私の好みだからという理由だったが、私は元々自分の思いや感情を言葉などで上手く表すことが苦手だったし、特に怒りや悲しみといった真剣な感情を表現することが恥ずかしく、隠してしまうような性格であった。私の好みである派手さは、それらを隠すためのもの、逆に言えば表現するための手段として私の中に定着していったものだと思うようになった。

今回の卒業制作では、そのような一見矛盾するもの同士を表現するものとして、私の思いと共通した印象を持つユニットバスの空間を参考に制作されている。また、こうした矛盾は人間なら誰しも持っているものであり、人間らしさの1つであると捉えることができる。このことから私は、自分の作品に私、またはその他の人間がそこに確かに居たという“存在感”をコラージュしたかったのかもしれない。



◀ 「繰り返す」 147.2 × 119.5cm ベニヤ、鏡、紙、布、蝶番

作品の中身について考えるようになったのは、第二次報告会に向けてこれらの作品を制作しているときだった。この作品たちは、原色を使ったり、ひとつひとつの素材へのイメージが強いものを使ったりして、見た目では派手なものになっているが、全て裏のイメージがある。

それは、私が普段感じていることであったり、派手さの内側にある暗い感情であったりする。それらを作品名や作品自体から感じ取ってもらえたら嬉しく思う。



▲「脆弱」 104 × 139.5 × 37.5cm ダンボール、プロジェクター

ニンギョウ ヒトガタ

人形には不気味さがつきまとうが、そこには魅力も同時に存在している。この不気味さと魅力は共存している別々のものではなく、同一のものであると感じている。

人の形でありながら人でないものを制作することで、僕の或いは人間の根源に近いものを見つけることが出来るのではないか。

美醜とかポジティブネガティブとかではないもっとフラットな感覚や表現。それは、誰でもない人形（にんぎょう）と自分の写し身としての人形（ひとがた）が共に成り立つものだと考えている。



▲「ニンギョウ ヒトガタ」 石粉粘土 165cm（起立時）



◀「ニンギョウ ヒトガタ」 石粉粘土 165cm（起立時）

僕の今回の卒業制作のテーマは「ひとのかたち」である。それは、表面的な部分だけではなく在り方も含めたひとのかたち。情報が経験をオーバーライドしている現代に多くの疑問や問題点を抱えている。そういった人の在り方は、非常に歪な形をしているのではないだろうか。

僕もまた現代に生きる人である以上、歪みを抱えているのだろう。故に僕はその歪みに反発するのではなく、あるままだに制作をする事を一つの目標としていた。

今回の展示にあたり、僕の作品を不気味だとか気持ち悪いだとか感じることもあるかもしれない。しかし、その感情はそれこそ現代の歪な「ひとのかたち」なのだとそう考えている。

「僕は 人形の中に人間性を見出し、 人間の中に人形性を見出した。」



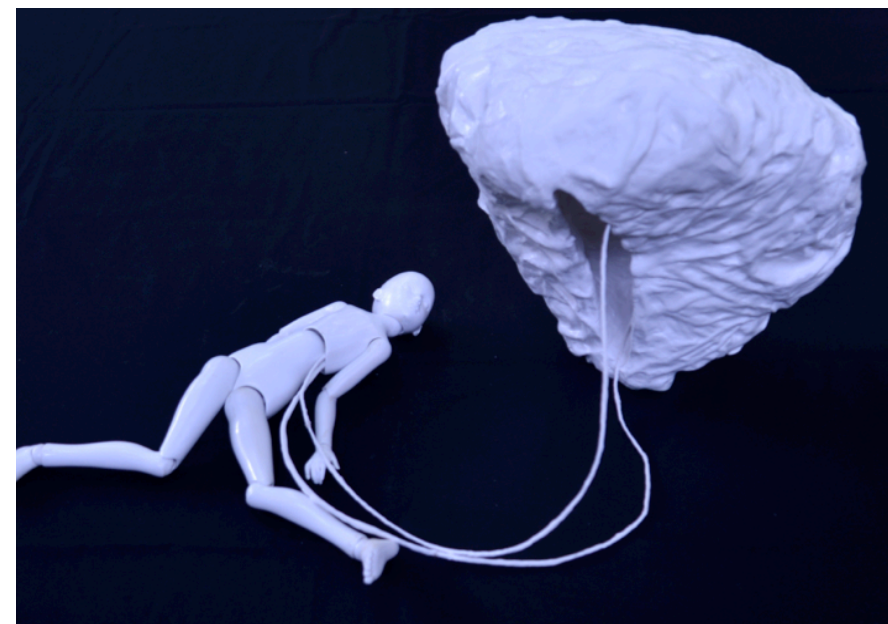
▲「力なき身体」 石粉粘土 サイズ可変

無気力な人間への投げかけを表現した作品。

自ら動く事を放棄した人間と、元から動く力を持たない人形の姿のイメージが結びついた。この作品を制作している過程で、人形の中に人間性を見出すきっかけとなった。

人形を置物や単なる物体としてではなく作品の素材として用いた作品。人形を命に見立て、産まれるというイメージと人形を結ぶ事で、ただの物質としての人形ではなく、「人形」という生き物として捉えた。

人形が自ら動く事は無いが、人形に生き物としての在り方を与えるために産み落と“される”という役割を持たせた。



◀「人形の殻」 石粉粘土 サイズ可変

「男性でもなく、女性でもない。それは人形としてのジェンダー。」

僕が彼（あるいは彼女かもしれないがここでは“彼”と呼ぶ）を作った事により彼の生命は始まった。

ここには創造者と被造物の関係性がある。神と人のように。僕と彼。彼を作るうえで僕は彼に何も役割を与える事はしなかったつもりだ。あるいはそれは何も与えないという役割を持たせてしまったのかもしれないが。役割とは人間関係であったり社会的立場であったり、そういったしがらみの事だ。だから彼は男性でも女性でもなく、子どもでも老人でもなく、あるいはその全てに当てはまる。生きており、生きてはおらず、そういう風に彼はつくられた。故に、彼はただそこに在るだけなのである。

人形としての生命を持った彼は僕ら人とは違う時の流れにいるが同じように生きている。停滞、静止に限りなく近い場所で。壊れ、崩れるその時を待っている。僕らが死に向かっているように。人間が死によって完結するように彼もまた彼がいつか崩壊する事によって完結する。彼の死とは何だろうか。きっとそれは彼が壊れた時に誰も直さなくなり、そのまま忘れられた時だろう。

僕自身は特定の神を信仰したりはしていないが、彼と僕の関係性を神と人になぞらえた時、僕の立ち位置は神に近いだろう。人が科学信仰により神を忘れたように僕の方が彼に忘れられてしまう時がくるのだろうか。少し楽しみでもある。

Kei

Naka

名嘉 溪

パノラマな風景、ジオラマの中の私

私のなかで、時に現実がリアリティを失ったように感じる瞬間がある。

それはまるで、世界がジオラマとパノラマで出来ていて、自分がその一部になったような感覚や、現実には人が暮らしている家を見て「遺跡を見ているような」感覚として、私の中に現れてくる。

一方でジオラマを見ると、偽物とわかって見ているにもかかわらず、はっとするほどリアルに感じられるときがある。現実にはリアリティを感じなくなる瞬間と、作り物のジオラマがはっとリアルに感じる瞬間…。そんな感覚をもとに表現を探求したいと考えた。

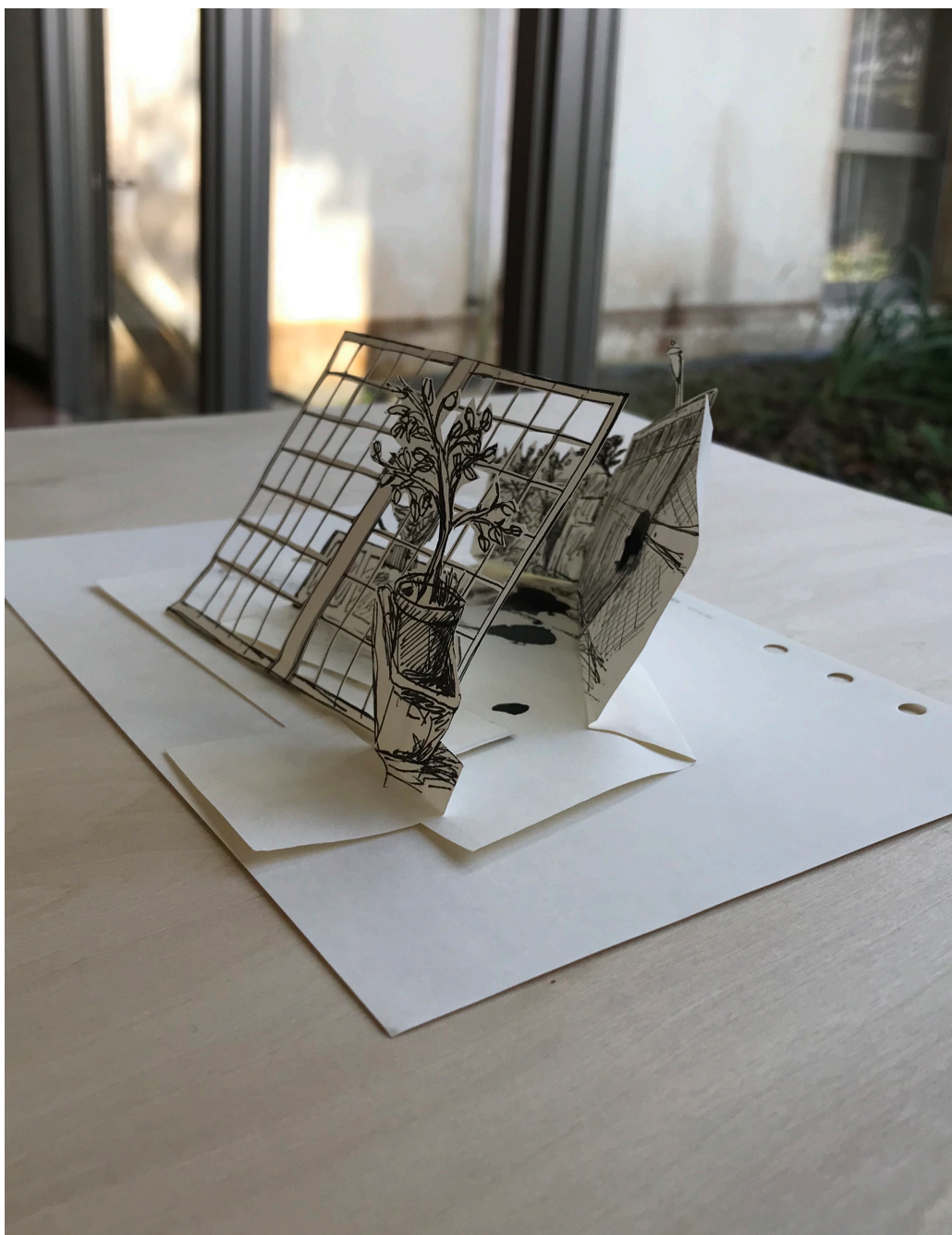
「現実から突然リアリティが失われる感覚 ……」

私は、バスや車の車窓から風景を見ているとき、いつもと変わらないまるで劇のような「日常」だと感じる。しかしその一方で、毎秒ごとに移り変わっていく景色に、過ぎ去って戻ってこない時間をリアルに体感してしまう。

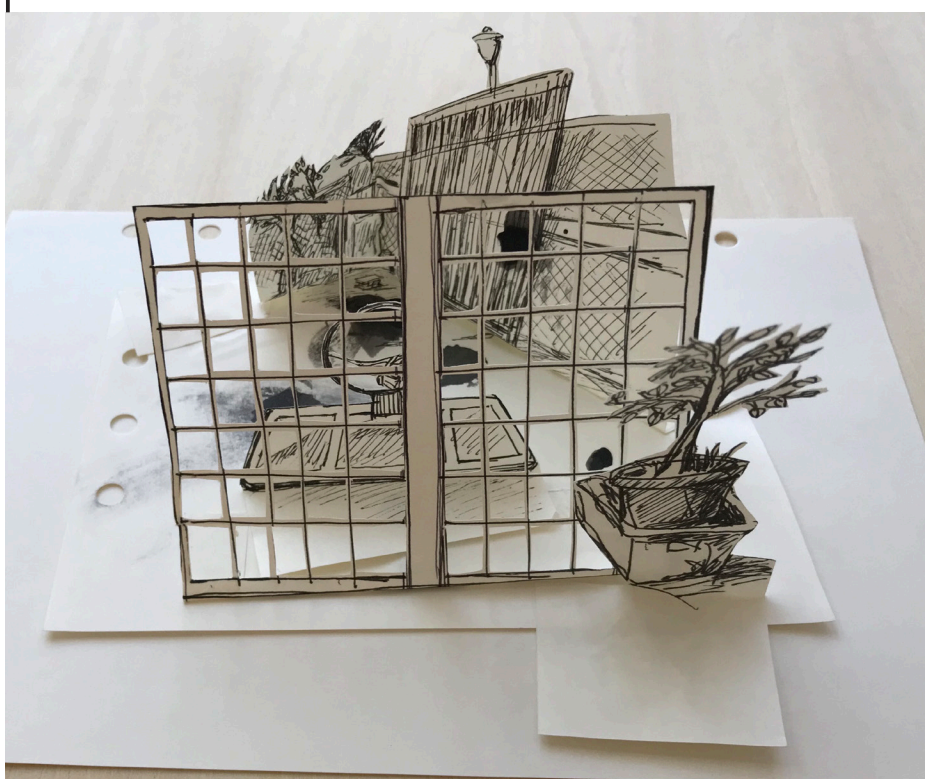
劇のように、ジオラマのように、遺跡のように見える景色と、それが間違いなく失われていく現実であること。このアンビバレントな感覚を表現できないかと考えた。

「自宅のベランダから外を眺めていた時に
“ピピピピピピピ カシャン”
という音が聞こえてきた。
ふと下を見ると自販機と
その前に人がいた。
その瞬間
ふっと現実味が遠のいて
まるでそれがジオラマの
ように見えた。」

——映像「ベランダ」の制作にあたって



▲「金網のある風景」 25×18cm スケッチブック、紙
ボールペン、鉛筆





私のドローイングを見た人から「何気ない一瞬にまるで永遠のように膨大な時間を感じる」という意見があった。その感覚はまさに、日常の風景が遺跡のように見える私の感覚であった。

日常の風景がまるで遺跡のように見える。私はどうしてそう感じてしまうのか。日常は、変わらないように見えて、同じ瞬間はない。刻一刻と過ぎ去っていく時間の中に私は生きている。膨大な時間軸の中で、ある一瞬を切り取って見れば、そこには過去も現在も差がないのではないか。過去や現在というのは人の主観でしかないのだから。

私がある風景を見たとき、きっと誰かもこのように風景を見た(あるいは見る)のだろうと思う。そのときの日常は、今となっては私は見るができない。日常と思われた風景は形を変えてしまい、ついには誰かの記憶の中にのみ存在するようになる。そしてそれは、今、ここで風景を見ている私自身にも当てはまる。私が表現したかったのは、その一瞬の記憶の中の風景だったように思う。

そのような相対的で、自分という形が先立って存在するような捉え方が、ときには遺跡や、ジオラマとパノラマの中に生きているように感じさせるのかもしれない。



描いたドローイングを切り抜き、立ち上げ、さらに描き込む。その過程で、繰り返し自分が見た風景を表現しようと試みた。ドローイングの不思議な存在感を感じながら、上から見たり、しゃがんで覗き込んで見たりしてほしい。そのときに、記憶の中の何気ない風景を思い出してもらえたら幸いだ。

いま、ここで見ている風景も

きっと記憶の中にしか残らない「遺跡」なのだろう。

卒業展に寄せて

この度、本学で美術教育を学び、卒業研究に取り組んできた学生たちの卒業制作展を開催することとなりました。「美術 / 教育」の幅広い分野で学んできた学生たちが、自ら設定したテーマを追求し、約1年間かけて個々の表現世界と向き合い続けたその成果を発表致します。

今年度の出品者は3名と少ない人数ではありますが、学んできた集大成として全力で取り組み、汲めども尽きぬ創造性を宿し立ち向かいました。まだ熟成具合は道半ばかもしれませんが、作品の背後にはそれぞれのチャレンジの軌跡が継ぎ目となり、前途の可能性を秘めたものばかりです。学生たちにとって、この「卒業展」の場がさらなる飛躍の機会となるよう、多くの皆様に立ち会って頂き、叱咤激励、感想などお言葉を賜れば幸いに存じます。

美術教育専修 教室主任

吉田悦治

2019年度

卒業展

琉球大学 教育学部 美術教育専修

<展示>

会期：2020年2月12日（水）～2月16日（日）

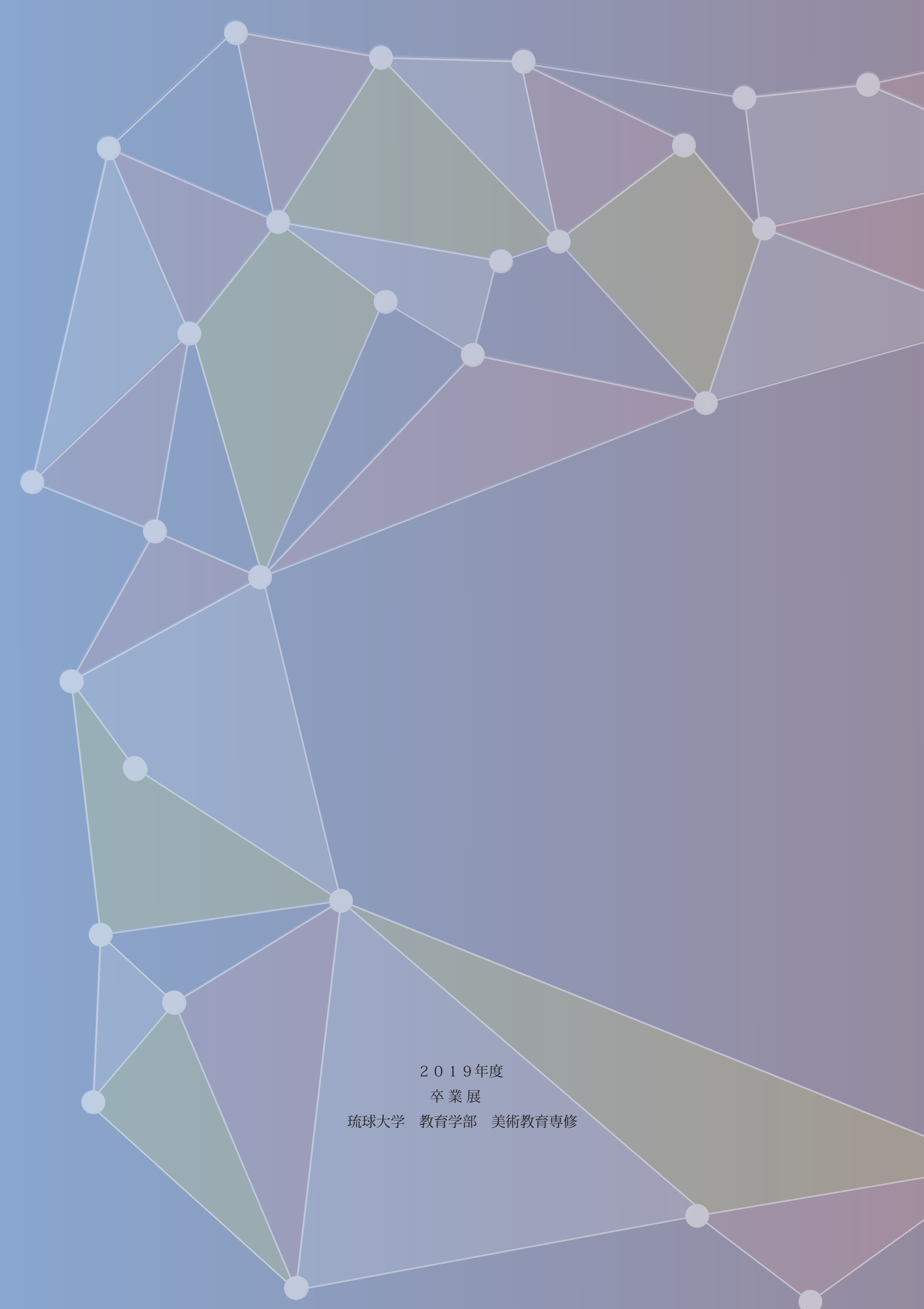
会場：琉球大学研究者交流施設・50周年記念館

<図録>

編集：美術教育専修 卒業展実行委員会

発行：琉球大学教育学部 美術教育講座

2020年2月 150部



2019年度
卒業展
琉球大学 教育学部 美術教育専修